

働いた人々に真心を込めて —小川栄一と戦後の大衆観光—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

だれでも気軽に観光旅行をするようになったのは戦後になってからだ。戦前は一部の華族や財閥にしか許されない特権的な贅沢だった。

藤田観光の創始者である小川栄一（1899-1978）は「戦争で傷ついた人たちのために憩いの場所を提供したい」という想いから観光の大衆化に情熱を注いだ。一時は三井、三菱、住友などと並び称された藤田財閥の邸宅、別荘、庭園などを婚礼・宴会・宿泊用施設として開放する。そして出張するサラリーマンのためにワシントンホテルを全国展開するなど現在のビジネスホテルの原型をつくった。

大衆に飲ばれる観光業への道を切り拓いた小川の経営理念は自由、平和、民主主義を基調とする戦後社会の価値観と共鳴していた。戦後の主人公が大衆であることを真っ先に見抜いていた。

箱根に温泉リゾート地

長野県上田市で生まれた小川は旧制上田中学から旧制水戸高校の第1期生となり、京都帝国大学法学部へ進学する。卒業後の1926年、安田信託銀行に就職した。

入行後9年目に35歳の若さで本店の貸付課長に抜擢される。競売で同行が落札した豊島園の再建を果たし、出向先の日本曹達やラサ工業で要職を務めた。

1938年、海外視察旅行から帰国した小川は安田財閥の幹部が勢揃いした報告会で財閥批判と睨まれる発言をして物議を醸す。「財閥はみずからの富を有限とし、限度を超えた富に対しては、やがての成長産業のために投資する。従来、財閥としてやらなかった投資、あるいは慈善事業など社会・公共ともに生かすことを考えていかねばなりません」と訴えて響きを買った。

藤田財閥が経営破綻に陥ると中核企業の役員として事業の整理・再建に奔走した。1948年、藤田財閥2代目当主の藤田平太郎が箱根に建てた別荘を譲り受け、周囲の反対を押し切って和風旅館の箱根小涌園を開業する。それまで高級別荘地に縁がなかった市井の人々に「健全で、しかも安価な憩いの場と温かいサービスを提供したい」と考えていた

当初は敷地内に温泉がなく専門家から掘削しても無駄だと言われた。だが綿密な地質調査によって不透水層が発見され、小川の陣頭指揮で掘削工事を開始する。翌年11月の夜8時頃、掘削深度



小川栄一

が約75メートルに達すると轟音と共に水蒸気が噴き出した。

新たに不動産業、鉄道業、観光業を専門とする藤田興業を設立して社長に就任した小川は小涌園一帯を温泉リゾート地と化すことに成功。勢いに乗って小涌園チェーンを全国で展開していく。

椿山荘を緑のオアシスへ

箱根小涌園の開設と並行して小川は1948年、東京・文京区関口にある椿山荘の復興事業に着手する。「戦後の荒廃した東京に緑のオアシスを」を合言葉に5カ年計画で往年の名園の復活に闘志を燃やした。

椿山荘一帯は南北朝時代から椿が自生する景勝地として「つばきやま」と呼ばれ、『東海道五十三次』で有名な安藤広重の浮世絵『名所江戸百景』にも描かれた。1878年、明治の元勳・山縣有朋がこの地を気に入って購入し、広大な屋敷を建てて椿山荘と命名する。

2万坪に及ぶ起伏に富んだ敷地は山縣の故郷である長州・萩の地形を再現した林泉回遊式の優雅な日本庭園に生まれ変わった。明治天皇や政財界の重鎮を招いて国事に関する重要会議が開かれたという。

1918年、名園を後世に遺したいという山縣の意向を受けて藤田平太郎が椿山荘を引き継いだ。藤田は山縣の邸宅を記念館に改装し、広島県の瑠山竹林寺から三重塔を移築するなど随所に歴史的な文化財を配して一段と情緒を高めた。だが1945年5月25日の東京大空襲で家屋や樹木の大半が失われてしまう。

戦後3年目にして椿山荘の復興を決断した小川は全国から有数の庭師を集めて1万本余りの植樹に打ち込んだ。「木が2本で林、3本で森と書く。集団で移せば必ず根づくものだ。これは植物の世界だけでなく動物の社会でも人間の社会でも同じことだ」という執念で1952年、ついに新生椿山荘が誕生する。格調の高い本館にはレストラン、バー、ダンスフロア、宴会場、結婚式場などを完備した。

翌年、小川は伊豆・小笠原諸島への航路を持つ東海汽船の経営にも乗り出す。1955年、藤田興業

の観光部門を独立させて藤田観光を創業し、初代社長に就任した。

無限の不平と共に歩む

1960年代の高度経済成長期を迎えると出張の多いサラリーマンの宿泊施設に目をつけた。たとえば上司と部下が出張する場合、それまでは旅館で相部屋というのが普通のスタイルだった。小川は個人でくつろげるプライベート空間を重視し、安くて快適に泊まれるビジネスホテルチェーンの全国展開を構想した。

1973年、名古屋国際ホテルとの提携事業を経て札幌に初の直営ワシントンホテルを開設。客室の構造を合理化して部屋数を増やし、コンパクトに改良したユニットバスルームを導入した。

サラリーマンに対する小川の気遣いは「大いに働いた人こそ大いに楽しむべきであり、観光事業はこの働いた人々に感謝をむねとしてサービスせねばならない」という積年の持論に基づいていた。とりわけ「観光事業とは簡単にいえばお客に喜んでもらう商売です。どうすれば喜んでもらえるか」という、自然環境や設備も大切ですが、実際はまわりの人々の温かい心、ことに従業員の真心が全部です」と観光業の真髓が誠心誠意のサービスにあることを繰り返し説いている。

一部の特権階層から大衆のレクリエーションへと観光業を脱皮させた小川は異色の財界人として獅子文六の『箱根山』や夏堀正元の『終身社長室』などの小説のモデルとなった。椿山荘の復興事業のような大仕事をやり遂げるうえで己の原動力となったのは「不平」だと常日頃から公言していた。「私は現在もなお借地の上の狭い家に住んでいるが、そのわけは人間には不平がなければ働く意欲を失うからである。不平はエネルギーである。私は人間にある無限の不平と共に歩むことが大衆と共に歩むことだと思っている」と「不平」を全面的に肯定して「叩けよ心の扉。大いなる不平に発憤せよ」というメッセージを遺した。小川のいう「不平」とは現状に決して安住しないチャレンジ精神といってもいいだろう。

揺るぎない信念はやがて山をも動かすという。たしかに小川は山を動かした。